

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

医術と宗教

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
富士川游
医術と宗教
書肆心水
Hoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

医術
と
宗教

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡序言
例 18 14

1

緒

言

神聖なる職務／医箴／僧侶と医術／科学的医学／哲学及び宗教の排斥／倫理の軽視

2

医

学

古代の医学の概念／科学の発展／精神科学／医史学／較近の医学の概念

3

医

術

経験的及び魔法的医術／自然治癒／科学的医術／解剖学的思考／機能的思考／器械論的思考／全人を対象とする医術／最高の芸術

4

医

術

人間奉仕／医家と僧侶／ギリシャ・ローマの医家／医家の資格／医学教育／専門分科／理想主義的の職業

5

医

家

65

58

45

37

22

SAMPLe Shouhi-Shinsui.com

生活調律の障碍／疾病的苦悩／社会的低格／病人の要求／社会的生活上の
の関係

6 疾病

疾病的観念／自己防衛／疾病概念の変遷／器質的疾病／機能的疾病

7 医家対病人

病人の信頼／医家の態度／自然科学的思考／論理的思考／形而上学的思
考／生物学的思考／哲学的思考／宗教的思考

8 宗教（上）

宗教の起原／人間の所産／不死の願望／文化の要素

9 宗教（中）

宗教の精神的現象／人格的宗教と組織的宗教／宗教が本づく精神機能／
感情／宗教的感情／宗教的觀念

10 宗教（下）

宗教の素質／宗教的體驗／宗教的精神／主觀の態度

11	信仰	認識と信仰／自然の創造者／創造神の説明／科学と宗教／客観的の真実／主観的の真実／思考の錯誤／信仰の種々相／俗信／宗教的の信仰
12	神仏	崇拝の対象／神の定義／仏と神と／人格神の否定／仏の意義／法の顯現／自我の状態／神仏の創造／理仏と事仏／南無阿弥陀仏
13	内観	自分の仏の創造／いわゆる楽天的生活／醉生夢死／虚生の憂／自是他非／理想的生活
14	道徳	道徳の心の世界／道徳の規範／道徳的の内観／道徳と宗教／宗教的の内観
15	仁慈	医は仁術なり／慈悲／聖道の慈悲／淨土の慈悲／冠履倒置／仁慈を体する

16

謙

虚

廉潔謙遜の諸徳／診療と謙遜／虚飾の心／謙虚の態度

17

忍

辱

惟れ忍び惟れ容る／病人の態度／忍辱の法／我慢する／柔和忍辱の心

18

生

死

死の問題／死の現象／死の苦痛／死時の安穏／死の観念の恐怖／疾病と死の恐怖／哲学的の説明／死の恐怖と理性／宗教的の説明／来世の思想／苦悩の浄化／希望を未来にかける／現在生活の指導者／宗教的人格

19

結

論

自然界の認識／科学の世界／思索の世界／鑑賞の世界／宗教の世界／医術と宗教

173

181

189

211

本書の表記について

*本書の元本は富士川游著『医術と宗教』（一九三七年、第一書房刊）である。本版では左記のように表記を現代化した。

*元本は旧漢字・旧仮名遣い表記であるが、本書は新漢字標準字体・新仮名遣いで表記した。
*読み仮名ルビは適宜加えた。

*送り仮名は、現今一般の感覚で違和感が強いと思われる場合に限り、現代風に加減した。
但し、「些も」（いささかも／ちつとも）のように読み方が一つならずある場合はこの處理を避けた。

*読点を適宜現代風に加えた。

*通用する漢字同士の関係にある場合、現代的な用字のほうに置き換えた場合がある（例、
著眼→着眼）

*元本の鉤括弧遣いは「」を基本として適宜「」も用いるやり方であるが、本書では
「」を基本として、書名類に適宜「」を用いるやり方をとった。

*踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した（二の字点は「々」に置き換えた）。

*「次ぐ／次く」のような些細な不統一はそのままにしてある。

*現今、漢字表記が避けられる傾向にあるものは、仮名で表記した。置き換えたものは五

十音順に次の通り（活用語尾と送り仮名は代表例のみ）。

雖も（→いえども）、愈々（→いよいよ）、所謂（→いわゆる）、況や（→いわんや）、印度（→インド）、墺太利（→オーストリア）、各（→おのおの）、此の如き（→かくの如き）、希臘（→ギリシャ）、基督（→キリスト）、茲（→ここ）、悉く（→ことごとく）、此の（→この）、是の（→この）、之れ（→これ）、是（→これ）、此（→これ）、虎列刺（→コレラ）、瑞西（→イス）、已に（→すでに）、乃ち（→すなわち）、其の（→その）、啻に（→ただに）、忽ち（→たちまち）、窒扶斯（→チフス）、独逸（→ドイツ）、兎も角（→ともかく）、尚お（→なお）、勿れ（→なけれ）、為す（→なす）、普魯西（→プロシア）、伯林（→ベルリン）、略ぼ（→ほぼ）、亦（→また）、儘（→まま）、若し（→もし）、本と（→もと）、固より（→もとより）、稍々（→やや）、動も（→ややも）、所以（→ゆえん）、羅馬（→ローマ）、淺猿し（→浅まし）

SAMPLE
Shoshi-Shinshi.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

医術
と
宗教

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序　言

ギリシャの医聖ヒポクラーテスは「人間を愛することが真にその術を愛する根源なり」とい、「神に対しては敬虔の意を致し、人に対しては信愛の情を尽すべき」ことを勧めた。ヒポクラーテスが西洋の医学界にありて万世の師宗と仰がれるのは独りその学術の上に於ける卓抜の見識によるのみでなく、又医家の倫理に重きを置きて「ただ善人のみ良医たるを得べし」といえる忠誠の心を医家に要求し、その人格を向上せしむることに努めたことにその因由を存するのであると思う。まことに理想的・倫理的の職業として済生惠人をその目的とするところの医術を実行するところの医家がその心の倫理的態度を重んずべきことは言うまでもない。我邦にありても古来「医は仁術なり」と言われて、他の業務と区別せられて居る。それは医家のまさになすべきことは含靈の疾苦

を救うにあり、謝礼はその仁慈的の勤労に対して賜わるところのものであることを示すのである。

言うまでもなく、医術は医学の知識を実際に応用するものである。そうして医術に関する知識は科学的研究の発展と共にますます恢弘せられ、又それに基づくところの診断及び治療の技術は日に月に精巧と熟練とを加え、これを昔時に比すれば全くその面目を一新したるの觀がある。更にこれに加うるに深切なる倫理的の心を以てして始めて医術は神聖の芸術たることが出来る筈である。

この点に立脚して、古今東西の医家の先輩が仁慈的の心を強くし、医家としてまことには美しい行為を示された跡を見るに、恰かも暗澹たる夜色の中に大小不同の星宿の輝くを見るような心地である。しかも精しくこれを觀察するに、そのすべてが内面の宗教の心に本づきて、外方に倫理的の態度が現われたのであることがよく窺われる。これによりて見るに、医術を行う医家の人格が宗教的であり、従つてこの医術が宗教的の心を本として行われるところに始めて惠人済生の方術が貫徹することが明瞭に知られる。

しかるに、今日の状勢は已むことを得ず、医家殊に若年の医家に対して医家の倫理が

忽諸に附せらるべきものでないということを説かねばならぬのである。昭和十年の春、余は一小篇『医箴』を著わして医家の倫理の模範を例示したが、それよりも余が一層必要を感じたのは医家をして医術と宗教との親密なる関係を明らかにせしむることであつた。昨年七月福岡に滞在したとき九州帝国大学医学部衛生学教室に開かれたる第七回宗教座談会の席上にて「医術と宗教」と題して少しく卑見を述べたが、もとより短時間に余が所思を詳細に述べ尽すことは出来なかつた。しかるに余はこの種の問題は誠実なる今日の医家諸君の特別の注意を要するものであることを信じ、所見を具してこれを世に公にし大方諸賢の批判を乞わんことを欲した。今幸いに第一書房主人長谷川氏の厚意によりて、新たにこの小編あたを世に公にすることを得たことは幸福の至りである。

余は今この小著を刊行するに方りて、一言以て中山文化研究所主中山太一氏に対しても感謝の意を表さねばならぬ。それは中山氏が物質上にも精神上にも余に対して加えられたる甚深の庇護によりてかくの如き所見を世に問うことが出来ることを得たことである。余は中山氏が學問を尊重するあまりに自費を投じて設立せられたる中山文化研究所にありて、極めて自由に、又余念なく、精神文化の問題、殊に宗教の事項につきて研究

序　言

することを得たのであるが、この小著もまたその間の産物に外ならぬのである。余の心情としてはその冥加の恩徳を謝するための、一部の責任をこの小著によりて果すこと出来ようかと、重々の喜びに堪えぬのである。

昭和十二年五月下浣

東京中山文化研究所に於て

富士川游記

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、この書、題して「医術と宗教」というゆえんのものは実際医家がその方術を施行するに方りて、いかに宗教の心の実現が大切の役をなすものであるかということを叙述せんがためである。勿論医術は医学の知識を以てその基礎とすべきであるから、それが科学的のものでなくてはならぬのである。しかしながらその対象とするところのものが生きたる人間である以上、医術はいわゆる済生惠人的のものたることを要する。それが器械化せられることはよろしくない。ましてそれが職工化せられることは以ての外である。

二、それ故に、医家たるものは科学的医学の研究によりて豊富にして且つ精確なる知識を獲得すると共に、精神科学、殊に哲学、心理学及び倫理学の知識に本づきてこの方術を円満に施行することを期図せねばならぬ。病人の方から言えば、疾病とはその器官の解剖学的变化よりもむしろその变化に本づく機能障碍を意識して苦悩を感じる精神状態であるから、従つて、それに對する医家の注意はひとり身体的方面のみでなく、その精神

SAMPLE
Share-Sensei.com

凡 例

的方面にまで及ばねばならぬ。

三、この点から見て、古より医家に対して要求せられたものは倫理の観念を強くすべしということであった。そうして医家の道徳としての幾多の規範が立てられた。又これに関する大小各種の著書が世に公にせられた。言うまでもなく、道徳の規範は人から人に伝えられるものであり、これを学びて知得することは敢えて困難でないが、それが倫理の感情に本づくものでなければ、すべてが偽善に終るのが常である。

四、道徳に比してなお一層、医術の実際に緊要の関係を有するものは宗教である。しかるに、医術と宗教に関する著述が、これまで世に行わるるもののは絶無とは言われざるにしても寥々として曉天の星よりも稀少なるはいかなることであるか。その原因の一つとして挙げらるべきは較近の医学が科学的思考を偏重して、形而上学的思索を排斥したる結果であるということである。しかしながらそれは言うまでもなく偏見である。我々はかような偏見を去りて中正の所見に拠らねばならぬ。

五、宗教は道徳に比して一層深刻なる主觀的の心のはたらきに本づくものであるから、真に宗教的の感情があらわれて居らぬ限り、宗教としての価値はない。今この篇に説くところの宗教は個々の人々の精神の奥に宗教的感情として自から湧き出するところのものを指すので、彼の教義や宗派や寺院や僧侶などを有するところの組織的宗教をいうので

はない。勿論宗教的に宗教のことを彼此と叙述するのもない、これを個々の人々の精神状態の特殊のものとして心理学的に叙述するのである。

六、かような宗教の心が医術の実際に重要な関係を有するのを示せんがためには医学及び医術に於ける形而上学的の所見を明らかにするのを必要とするがために、余は先ずこの問題について概要を挙げたが、この所見を叙述するにあては左記諸家の著述を参考した。

Curt Elze, L. R. Grate, Brugsch, E. Lieck : Grundlagen und Ziele der Medizin der

Gegenwart 1929.

Richard Koch : Der Begriff der Medizin. 1930.

O. Temkin : Die Geisteswissenschaften in der Medizin. 1930.

Haeblerlin : Die Beziehungen zwischen der Individualität des Kranken und der des Arztes. 1930.

Martin Sihle : Ueber das Weltbild des Arztes und den Sinn der Krankheit. 1934.

Henry E. Siegertst : Einführung in die Medizin. 1931.

Hans Much : Der Wesen der Heilkunst. 1928.

Georg Honigmann : Das Problem der ärztlichen Kunst. 1922.

SAMMELLE
Schi-Skinsu.com

凡 例

Paul Diepgen: Die Grundlagen der Medizin im 19. Jahrhundert und ihre gegenwärtige Krise.

Deutsch. med. Wochenschr. Nr. 52. 1928.

V. Krehl: Wandlungen der ärztlichen Tätigkeit in 50 Jahren. Münch. med. Wochenschr.

Nr. 24. 1929.

August Bier: Wesen und Grundlagen der Heilkunde. Münch. med. Wochenschr. Nr. 4 ff.

1931.

余の所見の確立が、りれ等諸家の著述に負うて、少なべたらしく明記して、諸家に對して謹謝の意を表する。

七、宗教に関する叙述は全然、余の所見に係るものである。しかし余は、りれと同様の所見をばこれまでしばしば世に公にしたのであるから、今いのりふに關して別に弁解がましい説明を必要としないと思ふ。

中山文化研究所に於て　富士川游記

1 緒 目

Wenn die Heilkunst nicht zur Religion wird, dem ist sie trostloseste, mühseligste und undankbarste Kunst auf Erden, ja sie muss ihm zur grössten Frivölfät, zur Lünde werden.
Huifeland.

「もし医術が宗教になつて居らなければ、それはその人に取りて地球上にて最も望みの無い、最も難儀で、又最も難有ない技術である。そればかりでなく、その技術は最大の軽佻浮薄のものとなり、又罪悪となねばならぬ。」——フーフュランド。

神聖なる職務

西暦十八世紀ドイツの臨床医家の中にて最も高名であり、一千八百十年に創立せられ

SAMPLE
Shoshi-chinsui.com

1 緒 言

たるベルリン大学の第一の教授であつたフーフェランドが、今から百余年も前に、かよう医術につきて言つたことは、今日の世の中でもなお通用する。ただ単に自己の幸福を増進する手段として、金銭と名譽とを獲得することを唯一の目的とし、その最善の場合にありても自然研究をつとむるより外に何事をもせぬとすれば、そういう人が医術の神聖を保ち、多くの人々の幸福を増進することが出来ぬのは昔も今も同然である。フーフェランドが晩年に自己の五十年の経験を本として著わしたる『経験遺訓』(Enchiridion medicum) は、フーフェランドが歿したる翌年の一千八百三十六年に刊行せられて、広く欧洲各国に行われた臨床の宝典であつたが、その実際篇に諸病の治法を説く前にフーフェランドは格言の多数を挙げ、新たに医術の実施に従事する若いものに対して「汝はなんひとであるか、又何をせねばならぬかということを常に考えねばならぬ。汝は生命の神聖なる焰の祠官として神から命令を受けたものである。又神が人々に与えたる最高の賜物たる健康と生命と、そうして神が人間の幸福のために自然の中に置きたる秘密力をとを管理し、又これを施与する役のものとして神から辞令を受けたものである。まことに高等にして且つ神聖なる職務である。これを純精に管理し、自己の利益と名譽とを離れて

神の名譽のために、又隣人の治病のためにつとめねばならぬ」と誠めて居る。言うまでもなくフーフエランドはキリスト教の国人の人である。キリスト教的の宗教思想の上から言えば、医家は神に仕うるの心を以てその業を執り、神の賜物たる健康と生命とをよく管理することをつとめてこそ、その医術が人間の職務として最も崇高のものと称せらるべきである。そうして、フーフエランドは独りその医術を宗教的にすべきことを口に説いたのみでなく、自分もその所信を身に実践することを怠らなかつた。フーフエランドはその医術の業を始めたときに、その日記に次のような自警の詩を書きつけたと自分で言つて居るのである。

人間の苦を甘くするがために

最大の幸福を享くるようとするがために

ここに補助者・慰安者として有るがために

神よ！ 私をしてあらゆる仕事に際して

日日の重責に際して、又おののの曇れる朝に際して

私をして勿体なく感ぜしめたまえ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

1 緒 言

慰安と補助とを喜ぶように

私をして神聖ならしめたまえ

「フェーランドがその医術を実施せんとするに方りて、かようあたに神に祈りてその心を正しく導かれるようにと念願したのは、フェーランドがキリスト教的の宗教思想に本づきて、医術を宗教にしようとつとめたためであろう。

医 篇

我邦の古代にあっても、医術が宗教的であるべきことは強く唱道せられて居った。平安朝時代円融天皇の天元五年（西暦紀元九百八十二年）に撰述せられたる丹波康頼の『医心方』の開巻第一に治病大体を説きたる篇に、次のようなことが記述してある。

「大医の病を治するや、必ずまさに神を安んじ、志を定め、欲することなく、求むることなく、先ず大慈惻隱の心を發し、普ねく含靈の疾を救わんことを誓願すべし。もし病厄の來たりて救を求むるものなれば、その貴賤・貧富・長幼・妍媸・怨親けんし・善友・華夷・愚智を問うことを得ず、普同一等皆至親の想の如くせよ。また前を瞻み、

後を顧み、自から吉凶を慮り、身命を護惜することを得ず。彼れの苦惱を見ては已れこれあるが如く、深心悽愴・夷嶮・昼夜・寒暑・飢渴・疲労を避くことなく、一心救に赴て功と作すことなく、病家に到りてたとい綺羅目に満つといえども、左右顧眄することなけれ。糸竹耳に奏するも娯むところあるが如きを得ることなく、珍羞遅に薦むとも食に味なきが如くなれ。濡碌兼ね陳ぶとも失うところあるが若くなれ。爾かるゆえんのものは夫れ一人隅に向うも満堂樂しからず、いわんや病者苦楚せば斯須も離れざれ、而かも医者の晏然たることも茲乃人神の共に恥ずるゆえん、至人のなさざる所なり」（もと漢文）

神を安んじ、志を定め、欲することなく、求むることなく、大慈惻隱の心を発して普ねく含靈の疾を救わんことを誓願することは宗教の心によりて始めてよく成し遂げらるべきである。普同一等に病人の痛苦を治することに心をかけることは人情として貴ぶべきことであり、徳義としてまさになさざるべからざることであるが、しかも宗教の心に本づくものでなければそれが徹底して実行せらるるまでには至らぬのである。

かくの如く『医心方』に挙げられたる医箴は深切に医術の倫理的意義を示すものであ

SAMPLE
Shoin-Shinsui.com

1 緒 言

るが、その本は支那の医書『千金方』に出でたものである。『千金方』は唐の隠士孫思邈の著述に成ったもので、從古医方の府庫と称せられ、歴代の医家は皆その法をこの書に採りて治病のことを講じたほどであった。孫思邈は京北華原の人で、唐の高宗の上元元年に召されて諫議大夫に任ずるの命があつたが固辞して受けなかつた。この時高宗が孫思邈に対して「仏經は何を以て大なりとするか」と尋ねたのに応じて「華嚴に若くはない」と答えたと伝えられて居るほどに仏教に通じて居つた。それから孫思邈は終南に入りて隠居し、志を仏典に篤くして「華嚴經」を写すこと前後七百五十部に及んだ。又華原の旧居を仏寺として大法弘通の処とした。そうして更に宣律部と交わりて深く仏教の奥旨を窮めたということである。かようにして、孫思邈はもと老子や莊子を中心とした隠士であったが、仏教にも志の篤い人であつたから、その医術を実施するにつきても仏教の志を本としなければならぬと信じて、その著『千金方』にかくの如き医箴を挙げたのであろう。

下りて鎌倉時代に惟宗具俊が撰述せる『医談抄』にも、次のようなことが記述してある。

「医道の本意は慈悲を先として救療の心を発すべきなるべし。千金方に云く、先発大慈惻隱之心」誓三願普救三含靈之疾。又云く医人不レ得下恃己所長、專心經中絡財物上但救レ苦之心、於冥道中、自感多福」、云々、内典にもむねとこの医の術をこそ利益には説て侍れ。最勝王經に云く、先起慈愍心、莫レ規於財利、我已為汝説二療疾中要事、以レ此救衆生、当レ獲無因果」と、云々

思うに、平安朝時代から鎌倉時代にかけて、仏教は広く我邦に行われ、儒教の思想と共に当時の人々の精神的生活の指導者であったのであるから、医家もまたその教を受けて、慈悲惻隱の心を以て病人に接せねばならぬことが説かれたのである。

儒教にありては仏教の慈悲に対しても仁を説くのであるが、『中庸』に「仁者人也」と説明してあるように、人は天地生生の心を受けて生れたもので、その身にこの生生の理を具えて居る、それを指して仁といいうのである。それ故に、『孟子』には「仁者人之心也」とあるが、天から賦与せられたる本心の全徳が仁としてあらわれるるのである。すなわち昼から夜を生じ、夜から昼を生み、春から夏、夏から秋と次第次第に生ずる、この生生の理を我々の心とする。この心は一切を愛する心である。要するに仁とは人類全体

SAMPLE ShoshiShinsui.com

1 緒 言

を結合する愛のはたらきである。そうして人類全体を結合するには各自の立場に応じて正しき行をせねばならぬ。医術を指して仁術といったのは、この意味に於て、まさしく宗教的のものであった。

僧侶と医術

かようにして、仏教の思想はもとより、儒教の思想もまた、單なる倫理的のものではなくして、頗る宗教的の意味の濃厚なるものであつた。西洋にありても医術の実施の上に宗教の心の重要であるということは志ある人々から強く主張せられたのであつた。元来、医術の起原は宗教と同じように、人の苦痛を去ることから始まつたのである。それ故に、上古の時代にありては宗教家が同時に医家であつた。そうしてこの医術も幼稚なる宗教的思想を背景として祈禱・誓言・犠牲・祭祀などの方法によりて、一方には病魔を払い除き、又一方には神祇の援助を乞うことが主とせられたのであつた。かようにして医家と病人との間に自からにしてあらわるるところの倫理の感情は、宗教的に表現せられて、病に苦しめるものをあわれむべきであることが医家の倫理の規範の主

なるものとせられたのであった。しかるに人間の文化が漸次に発展したために、医術と宗教とは互いに分離して各々その目的とするところに向つて進むようになつた。西洋にありては中古、学術が頽敗したときといわゆる僧侶医学があらわれ、我邦にありても室町時代学問の権が僧侶の手に移つた頃、医家の名高きものは多くは禅宗の僧侶であったが、その後に至りて、西洋には大学の創立があり、我邦にありては織豊二氏の代を過ぎて江戸時代に及び、医学の勃興と共にかくの如き状勢は全く一変したのである。

科学的医学

西洋にありても、プラーテ、ウイーチン、ハイデルベルグ、ライプチッヒに創立せられたる大学はドイツ大学の最始のものであつたが、これ等の大学にて医学を教授する方法は概して先ず哲学と自然科学とを修めしめ、それから始めて医学の修業に取りかからしめ、更に数学期を経て学位試験の後に始めて開業の権利が与えられたのである。そうしてかくの如き科学的医学を主としたる大学にありて医家の道義を忽諸に附せざりしことは、ヘルムstatt大学の教授の規則の中に「吾人は神の命により、神より招かれて治

1 緒 言

療の術を司どりしヒポクラーテス、ガレーヌス及びアビセンナがなせし如くに、我が医術を保持し、且つ教授によりてこれを拡張することを勉むべし。すべての経験家、パラツエルズス学派及びその他の頽敗せる医学にしてガレーヌス及びアビセンナの学説と一致せざるものは全然これを我が大学より排斥すべし」と書いてあるのを見てその一斑を窺うことが出来ると思う。十六世紀以後にありて西洋の医学は漸く科学的のものとなり、宗教とは相離れたのであるが、しかも宗教に本づきたる道義はなおこれを伝え、医術はなお倫理的技術としての特性を具えて居った。しかるに、近世十八世紀の頃に至りて仏国に政治及び社会上の一大革命が起り、宗教及び科学の領域にもそれが波及して国家の基礎までをも動搖せしめるようになつた。医学もその風潮に抵抗することが出来ずして、従来主に理想主義的であったものが、漸次に自然科学的のものとなり、それまでは学術の修業と相併びて人道を重んずることが医家に対しての主なる要求であつたのが、たちまちにして変動して、医家の価値は科学的知識によりて判断せらるるようになり、医学は一体に客観的にして且つ研究的となり、医家の努力はなるべく善良の療法を発見しようとするよりも、むしろ興味ある科学的の発見をなして学界に貢献しようとするこ

となつた。それから医家の技術としては疾病的診断を精確にするということの方面が著しく発展したのであつた。

哲学及び宗教の排斥

かくの如き実験的・科学的の医学を奉ぜるものは専ら覚官的観察に拠ることをつとめ、これに反して一切の哲学的思索及び宗教的信条を排斥し、自然的法則を尊重するに対し、倫理的法則を蔑視するようになつた。そうしてこの実験的・科学的主義は時代精神の波に乗りてますますその勢力を發揮し、たちまちにして仏國の国境を越えてオーストリアに入り、それより直ちにドイツに移り、ここに迅速の発達を遂げ、その科学はますます豊富になつたのである。これと同時に医学は幾多の専門分科に分かれて、その科学的研究はますます精緻の域に達したが、しかしながら他の一面にありて従来人道的修養の第一要件とせられたる哲学は医家に取りて何等の力もないものとなり、又むかしから医術の実施の上に緊要とせられたる宗教は医家には無用のものであるかの如くに考えらるるに至り、むしろこれを迷信として排斥するものすら多く現わるるに至つた。顕微鏡・

SAMPLE
Shishishinsui.com

1 緒 言

解剖刀・試験管・研究室などが自然界に於てますます新発見の道を開き、科学はいよいよ豊富になった。そうしてかくの如き自然科学的主義は、智能の修養と知識の獲得とに最大の価値を置きて、感情及び意志の修養はこれを等閑に附したるが故に、医術の倫理的方面はますます軽視せらるるようになった。十八世紀の終りから十九世紀の初めにかけて外科を以てその名を揚げたるドイツの医家ストローマイエルはこの事につきて叙述して、次のように言つて居る。

「彼等実験の徒輩は聰敏にして且つ博識の人々なり。然れども医家たるもの天職、仁慈及びこれに本づくところの臨床觀察の慎密、判断の謙遜などの諸徳は彼等に亡び果てたり。剖検記事に畢らざる病歴は彼等に興味なきなり。又肉眼的の病理解剖は彼等の倦むところなり。理学的診断は不確実なりとせらる。既往症及び徵候は合理的のものにても彼等には甚だ疑わしきものたり。療法に至りては敢えてその如何を問わず。もし彼の徒と病床に相会せんか、往々その無智に驚くべきことあり。彼等は肺炎と肋膜炎性滲出物とを鑑別することを知らず、遷延せる腸チフスと慢性腸潰瘍とを区別することを知らざるなり。外科的疾患に方りて、彼の徒は常に巻尺を

携えたり、測らずして脱臼を認識し且つこれを整復するは彼等に無謀と思わるなり。彼等は波動を発見し能わざりき。これ彼の徒は手指の微妙なる感覚を以て精緻ならずと做せばなり」

倫理の軽視

ストローマイエルは、かくの如く医界にありて自然科学主義が独り盛んに行われて、その人道的・倫理的方面がますます軽視せられることを慨嘆したのであつた。我が医界に於ける状勢は今日にありても、なおストローマイエルが慨嘆せる時代と同様にかなしむべきであると言わねばならぬ。ここに於て余は彼のヒポクラーテスの古き語を思い出さざるを得ぬのである。

「すべての科学的の技術にして金銭を得ることを目的とせず、又不名誉の事をしないことを本として施されるものはまことに美しい。もしそうでない場合にはその技術は当然賤しめられるものである。云々。それ故に上に述べたる事項の日々のものを獲得せんとするならば、哲学が医学の中に入らねばならず、医学が哲学の中に入

SAMPLE
ShoShinsui.com

1 緒 言

らねばならぬ。そうして医家にして同時に哲学者たるものは神力と等しいものである。實に医家と哲学者との間には著しい差別はない。それは哲学の性質たる無私、考慮、品位、尊敬、判断、安静、果断、清潔、明朗の談話、生活に必須なる知識、邪惡の嫌惡、迷信皆無、神的誠実は医家にも同じくこれを存せねばならぬ』

ヒポクラーテスの所見は、経験的にして且つ健全なる自然観察を本として、疾病的症状を明らかにし、自然的方法を応用してこれを治療することであつた。そうしてその科学的の根拠としては哲学を主とし、解剖学及び生理学などの知識はまことに軽少であつた。ヒポクラーテス以後今に二千数百年、科学の發展はまことに甚著で、これがために医術が進歩せることは言うまでもないが、これによりて綜合的に医術を見る却是つて忽諸に附せられ「ただ善人のみ良医たることを得べし。医の術たるや、神に対しあては敬虔の意を致し、人に対しては信愛の情を尽すべきものなり」と、ヒポクラーテスが説いたような医家の道義には重きを置かれないような傾向になつた。

しかしながら、我が医術は病みたる人間の痛苦を治癒することを主とするものであ

る。それ故に医術を施して以て疾病的診療を任務とするところの医家は、その目的を達するがために自然科学の知識は勿論、哲学的の思索を深刻にし、その学と術とが論理的・科学的であるべきことを必要とすることは勿論、当事者たるもののが、人格が宗教的であることを重大の条件とすべきである。それにも拘らず、今日の時代にありて、ただ論理的・科学的方面のみのことが盛んに説かれて、精神的方面のことが度外に措かれて居るような観があるのは甚だ遺憾の至りである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

18 生死

死の問題

すべての生物は皆死なねばならぬ。植物も動物も又我々人類も早かれ遅かれこの世から奪い去られるものである。そして、この痛ましき経験は常に新しく反復せらるるもので、詩人と哲学者とは死を以てその觀察の好題目となし、何が故にすべての生物は死なねばならぬか、又生は果して何の用ぞということを問題とした。すべてのものは果して真に夢と共に終焉となるのであるか。或いはそれを超越して、精神的存在がありて、永久に持続するものであるかと、いうことがやかましく論議せられた。これに対して自然科学者は詩人及び哲学者とは全くその見地を異にしながら死の原因と現象とを明らかに

せんことを試みた。何れにしてもこの世界に存する限りは、何人といえどもこの無情なる自然的法則を免かれることは出来ぬのであるから、生死に関する問題はすべての人々にありて同様の興味が存するものである。

死の現象

実際の事実として見るとときは死は普汎的の自然現象にして、一切の生物は絶対にこれに服従せねばならぬのである。死とは生物を構成するところの物質がその一切の生活現象から離れ、運動、栄養及び感覚作用が身体を去り、意識が消失することをいうのである。そしてその物質を構成するところの化学的成分は土地に帰り、空氣に帰り、最も隣接せる周囲に帰り、ただ骸骨のみを遺残し、それも大抵は同じく分解して遂に消滅するのである。かくの如くにして、死は生物の終局にして、生物の種々の性質及び活動は死を以て終結するのである。最早思考することが出来ず、活動をなすことが出来ず、約めて言えばその個性が全く消失するのが死である。

SAMPLE
Shoshin-sui.com

18 生死

死の苦痛

我々がもし自分の死につきて考えるとき、第一に死によりて我々は最愛の父母や妻子や兄弟姉妹などから離れねばならず、住居や財産やその他の所有を捨てねばならず、そして死したる後は暗黒にして頗ぶる不安のものである。かようにして、死は人々の苦痛とするところである。しかしながら、医家が瀕死者の床上に見たるところと、すでに一たび死に直面したる人々の陳述とに拠りて見れば、死そのものは概して苦痛のものにあらずとすべきである。勿論、死が何^{なに}の場合にありても苦痛がないとするのではなく、ただ世間の人々が通常思考するが如くに死は苦痛なるものではないというのである。

死時の安穏

ファーフェランドの『長寿法』の中には死時の安穏なることにつきて次のような記載がある。

「何人なんびとといえども未だ曾て死を感じず、且つ我々はこの世を見捨てるときは恰も我々がこの世に出生したるときの如く、最早我々自らの意識を有せざるなり。……人間は死を感じること能わず、何となれば死はその生活力を失うものにして生活力を失うと共に我々は同時に感覚を失い並びに意識を失うものなればなり。然れば同一時に於て存在の感覚を廃することなしに生活を見捨てること能わず。或いは寧ろすでにこれを廃したことなくして生活を捨てること能わざるなり。……二、三瀕死者の痙攣・啼鳴・死戦等は我々を惑わすに足らず。人々はこれを苦惱ならんとするも、しかもこれは全く何事をも感ぜざる永別者の悩むところにあらざるなり」

今から凡そ百年前にフーフェランドが死の苦痛につきて、かように説きたることは今この代にもなおまた通用することである。病人の臨終に列席したる医家の觀察は大抵の場合、死は苦痛なく、人々は悩むことなしに生から死に移るものなりとの断案を証明するのである。殊に老衰死の如き自然死の場合にありて死はすべての他の死の場合よりも安穏且つ軽易なることは人々の普ねく認むるところである。

死の觀念の恐怖

死するときに方りては病人の意識は消失して居る。まさに死せんとするに臨みても意識は朦朧状態をあらわすものである。それ故に死そのものは人をして苦痛を感じしむるものでなく、死を恐怖する、いうはその実、死の觀念を恐怖するものである。我々が生活せる間、意識が明瞭であるときには死の觀念は我々をして恐怖の念を起さしめるのである。一千八百三十一年ドイツ・ベルリンにコレラ病が流行し、哲学者ヘーゲルがこの病に罹りて死亡せるを見たるショペンハウエルは疾病と死とに対して劇しき恐怖を起し、倉皇行李をおさめてベルリンを去りこの病に罹るの恐れなきフランクフルトに転住した。そうしてここに宣言して「最大にして且つ最悪なる禍は死なり、^{しかし}而して最大なる恐怖は死の恐怖なり」と言つたと伝えられて居る。しかもショペンハウエルの説に拠れば死を恐怖するは我々の知的方面ではなくして、あらゆる生物が死を恐怖するはその盲目的意志によるものであるとするのである。そうしてその盲目的意志とは我々の理性とは交渉のない純然の感情に本づくところの心のはたらきであるが故に死の恐怖の念は推

理及び反省によりては撲滅することが出来ぬというのである。

疾病と死の恐怖

殊に不治の病に罹り、或いは病悩に繫縛せられたものが、死を恐るることは格別にして、それがために精神を畏縮せしめ生力を萎憊せしめ、その病の予後を険悪ならしめることがある。かような場合病人は自から死生を疑うによりて医家の言語や態度によりて以て自分の死生を決せんとするのが常であるから、医家たるものは戒慎して病人の希望を絶ち、勇気を沮喪するようなことを避けねばならぬ。医家はただにその術を以てするのみならず、言を以てもまた能く病人の生命を短縮することがある。もとより医家が故意にこれをなすのではなく知らずして病人の死を促すことがある。それ故に医家が病人の死生の際に処して、その処遇を誤ることなく、その際医家がもし病人に何物をも与うることが出来ず、その唯一の願望たる健康をも与うることが出来ざるときには何物をも病人より取り去ることのないよう^{あた}にせねばならぬ。まことにこれは医家の貴重なる職務である。そうして、医家がこの貴重なる職務を実行するに方りて重要な関係を有する

は、死生の問題につきての医家自身の心の状態である。言葉を換えて言えばこの場合、医家の心が宗教的であるか、宗教的でないかということが重要な関係を有するのである。

哲学的の説明

生を愛し、死を憎むことは人間の情として生来これを存することは彼の飲食や生殖の慾と同じようである。そうしてそれは年齢と共にその強度を加え、小児及び少年は速かに大人たらんことを希望すれども、大人は老人となるを欣ばず、人生の自然の期を通過せるを喜ばずして却つて悲哀の心を以て死期の近づくを見る。かように自然是一方にありては人間の生活を導きて死の最期に至らしめ、他方に於ては避くべからざるところの最期を恐怖せしむるほどに人間の精神を発達せしめたのは、どういう訳であるか。かくの如き自然の自家撞着は、いかにこれを説明すべきであるか。又その矛盾によりて生ずるところの苦悩はいかにしてこれを消散せしむべきかということは哲学の問題として昔時から今日に至るまで種々に論議せられて居る。しかしながら今ここに死生の問題に關

する哲学上の所見を穿鑿することは出来ぬことであるから、そういうことは省略して、諸派の哲学が説くところの要旨を挙げて言えば、個人の生命は、結局、宇宙に存するところの普汎的原力の中に、攝取せられるものであるとせられる。ただ一人孤独のものとして存在するから死が恐ろしいのである。全きものと一つであることを感ずればそれは永遠に亡びざるものである。そうしてこの普汎的原力とは或いは観念であるといい、或いは意志であるといい、或いは勢力であるといい、諸説が一致して居らぬ。その本体は漠然としてこれを明らかにすることは困難であるが、ともかくも、汎神論的に考えて、宇宙の中に大なる力が存し、その大なる力から我々の身体や精神が小なる力として顯われたものであるとし、その小なる力が個性として独立して存在することが止みたるのが死であるから、死するとときには小なる力は故の大なる力に帰るのであるとせられるのである。個々の人格が終に滅亡することはもとよりのことであるが、しかし我々の身体の一本原子だも消滅せざると同じく我々の靈魂もまたその一小部分をも失うものでない。死によりて我々の人格が滅亡したるときに方りては以前に個人としてなしたる行為が更に人類全体の生活と結合することによりて、それが永久に寂滅することはないとせらるるの

である。

奥田頼杖の『心学道の話』（天保十三年刊行）の中に生死のことにつきて、極めて通俗的の説明がしてあるが、その大要を挙げると、元来この生死は一理のもので、昼と夜と、寝たと起きたを見るようなものゆえ、生まれて来ると、死んで逝くとは何も別々のものではない。これを衣服の事にたとえていえば、この衣服の出来たところが生といいうもので衣服が生れたのである。それが段々と古びてゆくところが老というもので、衣服の年が老いるのである。それから、裾が切れたり、肩が破れたりするところが病といいうもので、それを幾度も洗濯して補綴したり針でさしたりいろいろと療治するが後には檻櫛になつて仕舞うと、それを檻櫛籠の中へ突き込む。それが則ち死というものである。しかしこれを衣服の境界から言えば死んだのであるが檻櫛から言えば生れたのである。これによつて生死は元來一理のものであることを知るべきである。これは我々の身がもと天の火、水、金、木、土の氣を仮りたものであるから、生即死、死即生、万物は生から死へ、死から生へと生滅流転しつつある。たとえば氷は水の凝つたもので、氷と姿がかわり名もかわるが、その氷も水に違ひなく、氷が解けたというも同じく水である。氷

の上にこそ仮に結ぶとか解けるということはあるが、元の水には何も結ぶとか解けるといふようなことはない。人間にあっても同じく、元の本性には生れるとか死ぬるとかといふことはなく、ただその形質のうつりかわるところに仮に生死の名をつけたのである。この道理によりて生滅共に不生不滅であることが明らかに知らるればすなわち生死を超越することが出来ると示したのである。

又別の方面から見れば生きたものが死ぬる、ということは一種の目的に適したる現象にして、古きものが死ぬるのは新しきものが生まれんがためであるから、人間の世界にありて死は有用にして又緊要のものであるとせねばならぬ。実際人間はその年齢に相応したる体力と精神作用とを有するもので、老人にはその年齢に相当して若年のものに比して多くの経験を有し、熟慮と判断とを有し、賢明なる勧告をなすことが出来るが、しあなそれは一方にありてあまりに用心の深きために大胆なる決意を麻痺せしめ、その経験に脅かされて往々憤発が阻礙せられる。それ故に世間にもし老人のみが多く集積するときは智力と活動力とに盛にして企業的なる少数者のために大なる迷惑となる。又限定せられたる地球の表面に多数の老人が集積するに至らば勢い嬰児が殺され、青年のものが

その生活を保つことの出来ぬような状勢に陥るであろう。かようにして、我々は人間全体の発展のために、新陳代謝をせねばならぬという自然の約束の下に生存して居るものであると考えねばならぬ。

死の恐怖と理性

かようにして、多くの人々が死を忌み、極めて強くこれを恐怖するのは全く死の何物たるやを知らざることに帰因すると言わねばならぬ。しかも理性によりて死の恐怖を除くことの出来ぬことを考うれば死の恐怖は本能的のものであるとすべきほどに強烈である。そうして、それは実際死そのものの恐怖にあらずして、死の観念の恐怖に外ならぬものであるから、まさに死に当面せるときの恐怖ではなくして、平時にありて死を考えるときにあらわれるところの恐怖である。殊に重病に罹りて荏苒として治癒せず、その予後の不良なることが予想せらるるような場合にはすでに前にも言つたように、死を恐怖するの念が強くあらわれ、それがためにその疾病的経過に、不良の影響を致すことが著しいのである。それ故に、病人の精神が安定してみだりに動かず、死に処して泰然自

若たることは、その疾病的治療を期することに於て、最も望ましきことであるが、この場合、病人に対する医家の態度も同じく死に処して泰然自若にして病人をして疑惧の心を起さしめざることを要する。又一方にありては、死の恐怖に対し相応の示説をなし以て病人をして安んじて病苦に忍従せしめ、これによりてその疾病的経過を善良ならしめる、ことを要する。この目的を達するがために第一必要なることは医家の心が宗教的であるということである。

宗教的の説明

親鸞聖人が文応元年十一月十三日、齡八十八歳の時に、その門人乗信房に与えられたる書状に次のようなことが書いてある。

「なによりも、こそことし老少男女おおくの人々の死あいて候らんことこそあわれに候え、ただし生死無常のことわりくわしく如來のときおかせおわしまして候うえは驚きおぼしめすべからず候、まず善信が身には臨終の善惡はもうさず、信心決定の人は疑いなければ正定聚に住すことにて候なり、さればこそ愚癡無智の人もお

18 生死

わりもめでたく候え、如来の御はからいにて往生するよし人々にもうされ候いける、すこしもたがわず候なり、云々

文応元年の前年は正元元年であるが、この年もその翌年も天下に疫病が流行し、これがために命を失うものが甚だ多かつた。それはまことに悲惨である。しかしながら我々人間は老いゆく身であり、それを超ゆることは出来ぬ。我々人間は病むべき身であり、それを超ゆることは出来ぬ。我々人間は死にゆく身であり、それを超ゆることは出来ぬ。我々人間の愛するものは皆転変無常のものである。我々人間は死にゆく身であり、生死を見て驚くべきことではないと説かれたのである。言うまでもなく、宗教は人間の死を無くするためのものでなく、ただ人間が免かれることの出来ぬ死の苦惱を無くするものである。死の恐怖を止めしめるものでなく、ただ死の恐怖のためにその平生の生活が脅かされることのないようにするものである。死ぬことを防ぐのではなくして、如何にして善く死ぬべきかを教えるものである。

来世の思想

宗教の感情は我々人間に来世の思想を起さしめる。来世とは我々の死後にあらわるべき世界にして、死は現在の世界から来世に移るべき橋である。もとより精神的に言うのであるから、別に第二の世界が現在の世界の外に存するというのではなく、現在の我々から言えば最高の理想の境地に外ならぬものである。それが宗教の感情が強くあらわれるによりて実在化せられて、仏教では淨土とか極樂とかと名づけられるのである。前の親鸞聖人の書状に「臨終の善惡をばもうさず、信心決定の人は疑いなければ正定聚に住することにて候なり。」とあるは、理想の境地たる淨土に往くべき仏の教えを信じて疑いのないものであれば、臨終はいかにあろうとも正しく來世の淨土に往くことが定まつて仕舞うから、死に際して何もうたえ噪ぐことはない、安心して死ぬことが出来ると言われるのである。科学的に言えば我々人間の身体は死と共に消滅する。従つてこの身体の機能としてあらわるるところの意識もまた消滅するが故に、個人として現存したるものが全然消滅することは明らかである。しかしながらそれは自然の現象をば一

18 生死

方の側から見たに過ぎぬものである。精神的に考えれば、我々の精神の作用は我々自身が意識するによりて始めて現存するものであるとせられるのである。しかしながら、かくの如くに、意識せらるる本質は、我々が意識せざるときにも同様に現存するものであるとせねばならぬ。現に我々は今それぞれ精神のはたらきをあらわして居るが、今日の科学の知識はこれを我々の身体に本づくものであるとする。それにしても、今現に意識するところの精神の作用も、生れる以前母の胎内に居つたとき、又生れてからまだ月日のたたない頃にもあらわれては居らぬのであるから、身体は既に存在して居つても精神の作用のあらわれたことが意識せられぬことがあるのは明瞭である。これから推して考えると、我々が現に自分として意識するところのものは我々の生命の根本をなすところの大なる力の一部をば我々が意識する間のもので、過去と未来とを現在から離して考えるところに、ただ現在のみが存在して居るようと思われるるのである。自然科学を奉じ、理化学的及び解剖学的の思考を主とする医家の中にはややもすればかような物質的の思考のみを尊重し、来世の思想を排斥してこれを荒唐無稽の説であるとする傾向がある。もとより来世と言つたところで現在の世界から離れたる世界が独立して存在するという

意味ではなく、現在に生存する人々が、理想の心境として、その死後に求むる心の世界を指すのである。

苦悩の浄化

我々人間の生活はまことに苦悩に満ちたるものである。生まれては死し、死しては又生まれ、生まれては又死ぬ。その生と死との間は苦悩の生活であるから、生死の苦界を流転すると言われるのである。しかしながら、かように苦悩と名づけられるものが我々人間の生活の全体で、もしこれを除くときはあとに何物も残らぬのが実状である。

生命があればすなわち苦悩があり、苦悩を除き去れば生命が無くなるのである。それにも拘らず、多くの人々はその苦悩が消えてなくなるようとにと念願し、その念願を達するがために宗教に頼ろうとするのが常であるが、宗教は決して人々の苦悩を断絶するがために使わるべき道具ではない。却ってその苦悩に直面して明らかにその真相を知るところにあらわるるところの一種特別の感情に本づきて宗教の心が起るのである。もし既に宗教の心があらわれるとときは実際苦悩に左右せられる心が、変化して苦悩に左右せられ

ざるようになる。ここにいわゆる苦悩の浄化が行わるので、しかもそれは決して苦悩の心が消えて仕舞うのではない。

希望を未来にかける

仏教にて涅槃の証を開くということは迷妄の心の世界から離れて真実の心の世界に入ることで、その心境に達したもののがすなわち仏である。それ故に、何人といえどもその境地に到りて仏と成ることは出来るが、しかしながらそれには眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が清浄で無垢となるよう修行せねばならぬ。又そういう修行を成就するがためにはどうしても心を凝して真理を知るために観念を十分にせねばならぬ。しかるに、我々はかくの如き観念も出来ず修行も出来ず、その心が弱くして且つ醜いために、もとより直ちに仏に成ることは出来ぬのである。それにしても、すでに自分の相の醜悪を見るということは更に向上的道に進もうとするのであるから、どうしても希望を未来にかけねばならぬのである。我々は過去より現在に及びて生活を続けて居るのであるから現在にありては希望を未来にかけて一步一歩とその道を進むべきである。親鸞聖人が「臨

終の善惡をばもうさず信心決定の人は疑ひなければ正定聚に住ることにて候なり」と言われたのは、死したる後に淨土に生まれるという希望を来世にかけてその希望を現実にすることを期することで、そこにあらわれるのが真実なる宗教の心である。そうして、この宗教の心は現在の自身が無能にして且つ醜惡なることに気がつきてそれを善美のものにしようとする念願のあらわれであるから、決して現在の生活を顧みないのではなく、却つて常に現在の生活の向上を念頭に置くのである。もし我々が向上の希望を未来にかけないで、現実の生活をそのままに進めるならば、言うまでもなく我々の生活は酔生夢死の状態と言わるべきである。しかも又未来の希望にのみ心をかけて現在を顧みざるときにはそれは我々の醜惡なる生活をそのままに肯定するもので、實に勝手気ままの放逸なる生活をあらわすのである。

現在生活の指導者

深く考えて見るまでもなく、我々は現在に直面して生きて居るものである。過去はすでに遠く去りて及ばず、未来はまだ来ぬ先のことである。ただ現在に生きて居るその現

SAMPLE
Shishi-Shinsui.com

在の心の中に過去幾千年のこともあり、又未来幾千年のこともある。その過去は経験の事実として現在の生活を指導するものであるが、その未来も確固の信仰として過去の経験の事実と同じように現在の生活を指導するものである。観念と修行とによりてその心を浄化し、従つてその住する処を淨土に化し、我も人も皆清淨なる心を以て生活し、自由円満の境地を此土に造り上げることはもとより望ましいことである。そうしてその目的を達するがために努力することはまさに美しいことに相違ない。しかしながらその結果の美しいものが現われることは到底これを未来に期せねばならぬ。かくの如き努力は畢竟^{ひつきょう}、道徳の心にして、これによりてその心を自由円満にすることは出来ぬ。かようには道徳が現在を教へ、その効果を未来に望むに反して、宗教は未来を説きて、その成績を現在にあらわすものである。この身が死してから後に来るべき生を指して来生[。]といい、又その世界を指して来世[。]といふも、その実は現在の自身の心に、そう感知するものであり、必ず淨土に往生して仏になるということも、現在の心がそう確信して疑わぬことである。そこへ生れて見なければわからぬというような漠然たるものでなく、又そういう來世[。]があるか無いかと科学的に研究することを要するものでもない。宗教の心があらわ

るれば、必ず無くてはならぬ世界である。現実の醜惡なる相に目が醒めたものに当然あらわるべき理想の境地である。自然科学的の思考を離れて別にそういう心の世界が存することは、決して自然科学がこれを否定すべき筋合のものではない。

宗教的人格

まことに、宗教の心が十分によくあらわれて、その人格が宗教的になりてこそ医家は、その済生の天職を十分に尽すことが出来るのである。病人が死生に処して疑惧するによりてその疾病的経過に不良の影響を及ぼす場合に方りて、宗教の心のよくあらわれたる医家のみが、よくこれを慰諭して病人をして安楽ならしめることが出来るのである。ただそれのみでなく医家にしてよく宗教の心をあらわしたときに、始めてその施すところの技術が軽佻浮薄を離ることが出来るのである。医家たるものは大慈惻隱の心を發して普ねく含靈の疾を救わんことを願うべしとの教を奉じ、徳義を重んじて病人に接することに心をかくれば、心をかくるほど、常にそれが不徹底に終ることをかなしまなければならぬのが我々の倫理の心の常態である。宗教はそういう自身をたのむところの心を捨

てて、自身の言うところ、行うところを、神仏の真実の心に対照して、常に自分の心の醜惡なることを内觀するところにあらわるるところの感情が本となり、それが意識の内容となりて、遂に意志に移さるのであるから、宗教の心が十分にあらわることによりて我々は常に迷妄の世界に住しながら、真実の光明に照らされて、自由安樂の生活を営むことが出来るのである。仏教にて涅槃の悟りを開くことを目的とすると説くは畢竟^{ひつきよう}に真実の智慧を獲べきことをいうのであるが、その真実の智慧を獲るがためには先ずその心を安定することを要する。その心が安定して後に真実の智慧が獲られるのであるが、その心を安定するがために仏教にては持戒を重要のものとする。この持戒とは要するに道徳的行為の実践に外ならぬものであるが、そういう道徳的行為は我々には徹底して実践することが出来ぬと、自分の心の相を内觀するときにそれが事実に於て道徳的行為の実践に心をかけるのである。かようにして、自分を内觀してその薄志弱行を歎くとき、かような向上的の希望を未来にかけねばならぬようになり、来生にて悟りを開き、淨土に生まれて仏になるという信仰は現在の自分を安定せしめるものである。自分が安定して始めて真実の智慧が獲られるのである。現在の我々の小智を主とする苦、

惱の生活が、これによりて始めて自由円満のものとなることが出来るのである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

19 結論

自然界の認識

我々人間は他の生物と同じく、自然界の一部として、この世界に生存するものである。それ故に周囲の自然界によく順応することによりて始めてその生命を持続することが出来るのである。他の生物と同じく我々人間の身体及び精神が意識せずして、よく周囲の自然界に順応することは全くその生命を持続しようとする自然衝動の作用に基づくものに外ならぬのである。かように自然界に順応して以てその生命を持続するは自然の法則として不意識的にあらわるものであるが、なお意識的に自然界に順応することによりて一層その目的が十分に達せらるべきことは言うまでもない。ここに我々人間が他の生

物、殊に高等の動物に欠げて備わらざるところの文化を有するゆえんが存する。

我々人間が周囲の自然界に順応するがためには第一に周囲の自然界を認識することが必要である。それ故に太古蒙昧の時代にありてももとより幼稚ながらも科学と名づけらるべきものは有りて、その智能に相応して周囲の事物を認識したのである。しかもその精神の作用がまだ十分に発達して居らぬために、太古の人間にありては、自然界の認識は、科学である、同時に、又宗教であつた。光輝彩然として大空に動くところの太陽を認め、皓々たる中天に月の懸るを見るとき、驚異の心は神秘を感じ、たちまちにしてその人々に相応の宗教の心をあらわすことが出来たのである。そうして、この場合にありては科学と宗教とは極めて仲の善い兄弟として共に同一の道を進んだのである。

自然界の認識が、我々人間の智能の発展と共に漸次に進歩した結果、現在にありてはそれが自然○科学○と名づけらるるところの独立の学問となり、従来久しき間、暗黒の裡にありて神秘不思議とせられたる方面にも新しき光輝を放ちてこれを照明し、自然界の真相を明らかにして、それによりて我々の生活を正しくし、又これを善くしたことの甚著なることは言うまでもない。

科学の世界

まことに我々が今日住むところは科学の世界である。我々の現在の生活は、自然科学の研究によりて明らかにせられたる方策に拠りて行われて居る。近きは電灯、電話、電信、電車などの類から、遠きは天文の日月星宿に至るまでその真相を明らかにしてこれを我々人間の生活の上に応用することはことごとく皆、自然科学の研究の結果によるのである。一部の人からは科学万能の時代と評せらるるまでに科学は我々人間の現在の文化の要素をなして居るのである。現に今日の自然学者は自然界のすべてのものを観察し、もし必要あれば一定の実験を施して各箇の現象の自然的原因を究め、これによりて得たる知識を根拠として忠実にその間に行われて居るところの不变の法則を帰納することをつとむるのである。そうして、かくの如き自然学者はその目的を達せんがために或いは数え、或いは量り、或いは計りてその事実を数量的に、客観的に明らかにこれを示すことをつとむる。すなわち自然学者は鋭き理性の力によりて明確に、一切の自然的現象に観察せんことを企図するのである。そうして、その成績が実際に応用せられ

て、始めて我々人間が自然界に順応するの方法が明らかにせられるのであるから、我々の世界から科学を除き去ることは我々の生活を滅亡せしむることになるのである。

思索の世界

かようには科学は我々人間の文化の要素として重要なものであるが、その目的とするところは自然界の事実を明らかにするにありて、その価値の如何は問うところではない。しかしながら、それでは我々の生活の要求は十分に満足することが出来ぬ。我々は一切の事実を認識してその真相を明らかにせねばならぬのであるから、事実の認識に次ぎて十分の思索をなさねばならぬのである。ここに自然科学に併びて哲学の重要な意味が存する。自然科学は精緻なる観察をなすがために、器械の補助を藉るまでに力を尽すのであるが、哲学はこれに異なりて経験と觀察とに限りて別に器械の補助を藉ることなく、すべて自然学者がなすようなことはその思索の最後の根拠をつくるための準備に過ぎぬのであるとする。哲学者は宇宙と生命との最後の大なる謎にまで立ち入りて思索し、自然及び精神生活に於けるもろもろの現象の重大なる関係とその意義につきて思

索する。そうしてかようなる深刻の思索は我々人間の生活の上に極めて必要なもので、自然界の事実の真相がこれによりて始めてよく十分明瞭にせられるのである。

鑑賞の世界

科学と哲学とのみでなく、すべての事物を鑑賞する。いうこともまた、我々人間の文化の要素として重要なるものである。自然科学が冷静なる理性を以て自然界の事実を見、哲学がそれにつきて深刻に思索する外に、感情の上に、自然界の事実を受け取るところに或いは歌い、或いは書き、或いはその他種々の芸術によりて、以て自から娯しむところに我々人間の精神生活が乾燥無味を離れて情味の濃厚なるものとなる。そうして、それは我々人間の生活を円満ならしめるために重要なものであるから、芸術は人間文化の要素として科学及び哲学と併びて如何なる場合にも人間に離るべからざるものである。浩々たる中天に懸るところの月が、この地球から幾キロメートル離れて居るか、月は地球の周囲を廻るのであるか、地球が月の周囲を転ずるのであるか、月にもこの世界と同じように動物が棲んで居るか。これ等の詮議は自然科学の領分である。人間はそ

ういう科学的研究の外に、「秋の夜はころもさむしろかさねても月の光にしくものぞなき」「ひとめみし野辺のけしきはうらかれて露のよすかにやとる月かな」と歌う。月の事実を究める外に、月が我々の情緒に致すところの感作を歌う。こういう鑑賞の心は人々の心を和かにし、その情味を暖かにして、生活の全体を温かにするものである。

宗教の世界

かようには、我々人間は自然界を研究し、思索し、又鑑賞することによりて、自然界をば十分に我々自身の中に取り入れるものであるが、それは要するに、自然界をば自分の外に置きてそれに対して自分の心をはたらかすものである。しかるに、我々人間はもとより自然界の一部であるから、我々は外方なる自然界に対するときにはわち我々の自身の中に自然界を見出さねばならぬ。こういう心からして自然に対する態度は、科学、哲学及び芸術とは相違して自然界の目的を知ろうとするのであるが、それは理性の力にては如何ともすることが出来ず。感情のはたらきによりて自然の中に存するところの偉大なる或物を感じし、従つて敬虔な心を以て、一切のものに対することによりて始めてそ

の目的が達せられる。宗教と名づけられるものはこの種の主觀の態度に外ならぬのである。俳諧寺一茶の句に「山の月花盜人を照したまう」とあるが、これはもとより月に対して科学的研究をしたのではなく、哲學的の思索を深くしたのでもなく、又風雅の情緒によりてこれを鑑賞したのでもない。月に対して、その中に存するところの偉大なる或物を見出して、月の光は平等に普ね々世の中を照して些も私するところがなく、花を盗むような悪人をも照らすという大慈大悲の心を歎称したものである。既に上章にて、宗教のことにつきてややくわしく他の方面からこれを叙述したのであるが、その要旨はこの簡単なる説明の中に尽きて居ると言つて差し支えないのである。

医術と宗教

これを要するに、宗教は我々人間の生活を円満にする上に、必要欠ぐべからざる精神的作用にして、有つても無くとも善いといふべきものではない。又道徳その他のものによりて代償せらるべきものでもない。仁慈・謙虚・忍辱等の諸徳は道徳の規範として最も重んぜらるるところのものであるが、しかもそれが徹底的に実践履行せられてその効

果をあらわすことはこれを宗教の心の発呈に待たねばならぬ。世の中には資性温順謹直の人にして、敢えて宗教を必要とせぬと揚言するものもあるが、これ等の人々はただ宗教の形式のみを考えて、それが我々の現在の知識に矛盾することを見て、宗教は無用なりと言うのである。実際にはそういう人々もその心の奥から湧き出いづるところの宗教の心に導かれ、その生活を営んで居るのである。それ故に、いかなる人にありてもその生活を円満にするがために場合に応じてそれぞれ宗教の心があらわれるよう宗教の心の素質は備わって居る。それが明らかに発呈するか否かはその人の内観の程度によるのである。

かようにして、宗教の心は何れの人々にも必要のものである中に、殊に医家は済生恵人を目的とするところの医術を実行するものであり、日常精神的にも身体的にも又社会的にも低格となれるところの病人に接するのであるから、死生の問題を始めとして、すべてに明瞭なる宗教的の思考を有し、又宗教的人格として仁慈・謙虚・忍辱の行をなすことを要するが故に、医家がその術を施すに方りて、宗教の心をあらわすことの重要は更に論ずることをまたぬのである。